
モノクロームの部屋の中、君だけが色をもっていた

朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロームの部屋の中、君だけが色をもつていた

【著者名】

朱

N6867C

【あらすじ】

中学一年の一学期、葵のクラスに帰国子女の転校生が現れた。甘く切ない異世界物語は彼との出会いで始まった。

キャラクター紹介

＜キャラクター紹介＞

久原 葵

誕生日
6月6日（現在14歳）

卷之三

卷之三

おどなしみで明るい性格で
ハレハレ感、魅惑的。

恋愛(愛恋)。

桜花中学一年五組、出席番号女子六番。

・ 安田 三サヰ (ヤスダ ミサヰ)

誕生日 12月10日（現在13歳）

体重 41.1 kg

はつちやけ娘。テンションが常に高い。

葵の小学校低学年からの親友。

桜花中学一年五組、出席番号女子一二番。

• 日向ヒュウガ 律リツ <転校生>

誕生日 1月1日（現在13歳）

身長 156cm

体重 38.8kg

美形男子。ものすごいモテモテ。

背は小さめだけど運動神経、学力はトップ。

金持ちらしく（葵談）、行き帰りはベンツで送り迎え。

悩殺笑顔はすごい威力らしい。（葵談）

恋愛経験はナゾ。

桜花中学二年五組、出席番号男子十四番。

・ 姓名 イチナ 深 シン <執事>

誕生日 2月2日（現在15歳）

身長 172.7cm

体重 47.8kg

律の執事。純日本人だけど生まれつき金髪。

何かとナゾが多い設定にしたのでこれから話の中で明かせていくようになんばります^ ^

いまのところはこんな感じです。

話が進んで行くにつれこのキャラクターも

増やしていくのでたまーに見てやってくださいね^ ^

キャラクター紹介（後書き）

初連載、一人でも多くの人に楽しんでほしいと思います。宜しくお願いします！

第一話 「帰国子女」

清々故に、その始まりは

第一話「帰国子女」

『葵つー！アオイつてばー！』

『、、、』

『もつ、何ボーッとしてんの？』

『じめん、じめん』

特に何も考えてなんかなかつたけど。

『てゆーかいつもとテンション違くないって…!!サヰ

いつもははつちやけてギヤグ言つたりするキャラなの。今日はなんだか大人しい気がする。

『そりゃ高くもなるわよ、知らないの？』

『知らないのつて、 、 何が?』

ミサキは大きなため息をついて、

『帰国子女、 転校してくるのよ、 あたしたちのクラスに』

『え、 もうへじじょおー! ?』

、 、 、 帰国子女つて、 、 、 英語ペラペラだよね! ? 女の子だよね、
[子女] だもん、 、 、 す、 すごいなあ、 、 、

『おー、 さつさと席付けー鐘鳴つてんだるーー! 』

ガラリとドアが開いて、 先生が少し大きな声で言つ。 あたしもミサキも慌てて席に座つた。

『つたぐ、 もうすぐ三年生なんだから少しへりに成長した阿呆どもー』

えらい男前なこの先生があたしのクラス担任の篠原美樹先生。 一応女だ。 つてゆーかそんなのビーでもよくて。

『むづ監知つてると思つけど、 転校生いるからー』

そう先生が言つた途端教室が一気にざわめく。 もちろんあたしも例

外じゃない。

『ホラ田向、入れ』

スラリと細く長い手足。

少し灰色のかかった銀色の髪と、透き通るようなサファイアの瞳。

中学一年の一学期、青春真っ只中の出来事だった。

第一話 「帰国子女2」

みつめる先の、

第一話 「帰国子女2」

『日向律です。宜しく』

サファイアが前を見て、
銀色が風に靡いた。

クラスが一瞬にしてピンク色の悲鳴で埋まる。『カツコイイ』やら
『カワイイ』やら、まあ確かにそうなんだけどさー！帰国子女って女
の子だけじゃなかつたんだ！

『ねえ葵！めちゃめちゃカッコいくない！？モロタイプなんだ
ぞ！』

いきなり肩を掴まれて、振り返ればミサキの真っ赤な顔。

『カツコイイつていうよりカワイイつていうんじゃない?あーいう
顔は。ちっさいし。』

『誰が小さいって？』

『は、せじゆもして、、、』

『はじめて。で、誰が小さいって?』

『あ、いや、その

やばい、ピンチ！ 激しい殺氣感じんだけど……つてゆーかこいつめんどくさい！ 156くらいかなあ、あたしより少しだけ高い、つてこんなときに何考えてんのあたしつてば！？ 周りから『話せていいなあ』みたいな話し声が聞こえるんだけど何にも良くないよ！ 見てよーの眼！ 明らかに食つてやるよみたいに！

『おい、何とか言つ、、、、』

『向

先生はあたしの眼の前にいる田向くんの背中を押して半場強制的に席に座らせた。ありがとう先生！

、、、ってあれ？隣ですか？

『解んないコトあるだろ？から、教えてやれよ』

少し強めに肩にぽん、と手が置かれた。

周りからは嫉妬や恨めしさの痛い視線。左からはもつ血出でんじやないか？ってくらいの視線。

、、、今の状況をどう抜け出しましょ？

桜花学校二年五組六番久原葵、只今ピンチです、、、、！

第三話 「狼一匹|兔一匹】

もつあぐ色づく桃色の頬

第三話 「狼一匹|兔一匹】

『『、、、、、、、、、、、、』』

あれから約5分。

朝礼も終わって休み時間の筈なのに今だあたしは席に座ってる。
何故なら左のお方が物凄い動くなオーラ（なんだそれ）を放つてる
からです。 、、、き、氣まずい…！

周りには他のクラスからの日向くん見学者やいつかのクラスの早々
と結成した日向くんファンクラブやる、 、、、、とにかく、日向
くん見つめてないで助けてよ!! サキイ…！

『、、、お前、名前は?』

あーもーどうしたらいいんだろー! いいやの! と思つて立ち上がる
つづりへつらせちゃひつが、、、、!

卷之三

あ、でもそれで逆に怒らせたら後が怖いからなあ、

『は？ く、久原葵です』

久原かお前

お、怒られる——！——！

『 、 、 、 、 、 、 、 は?』

あたしは必死に頭を机に食い込みながら頭を下げる。

『あつあの、せつせつの、小さこつて禁句用語（？）を、、、……』

『、、、あれはもつこい。』

『、、、<』

『そんなに氣にしないから、頭あざる』

『あ、でも』

『いーから。』

ぐこつと田舎くんはあたしの両頬に手を添えて上へ持ち上げた。

『、、、赤くなつてゐる』

『え、』

おでこじ、暖かい何かが、触れた氣がした。

『、、、、、え?』

その暖かいものが何なのか理解したとき、
あたしのものじゃないいくつもの高い悲鳴が、空にこだました。

第四話 「最低狼心観」【前編】(あらわし)

前半は律視点です！

第四話 「最低狼に罰を」

色づいた桃色の頬

第四話 「最低狼に罰を」

『ちよ、ちよ、葵あんたなにしてんのよ——。』

『いやいや、怒るんなら普通あたしじゃなくて田向くんでしょ。』

『 そ う だ け ど な ん か ム カ つ く ー ー ー ー 』

『意味わかんないし！！』

『いやだつたか?』

後ろから聞こえた日向くんの少し低い声。

「あ、あのねえ！嫌とかじやなくて、

『じゃあよかつたのか?』

۱۷۷

田向くんは悠々と自分の席でこじこじと笑いながら机を見上げてくる。

あーもうー何なんだコイツはーーー！

『あーいい』とは好きな女の子にしてよね！』

『忘れてなきやダメなのか?』

『当たり前でしょ！！』

「、 、 、 わかつた

田に向へんせキヨトノと不思議そつにしながらも領く。

(可愛らしい、)

あたしはもしかしたら女の子より可愛いかも知れない日向くんを睨みながら、席に着いて一限目の道具を鞄から出した。

結局その日はそれ以上田舎へとせ歸らずに家についた。いや、別に話したかったわけじゃないけど！

ちなみに、サキはカツコイイけどよく考えたらタイプじゃないとかも好きにはならなかつたらしい。

田向くんはお金持ちなのかもしれない。帰るときに校門に黒いベンツがとまっていて、それに田向くんがのっていた。まあ帰国子女には有りがちな設定だよね、なんて思いながら素通りした。運転席に座つてた金髪の男のひとと眼が合つた気がしたけど。

家について、手を洗つて。ふと鏡をみたら、あんなに赤くなつて痛かつたおでこが治つていた。

『あれ、治つてゐる』

『じだつたつて、とその場所に軽く触れる。だけど田向くんの唇の感覚が蘇つて、無性に恥ずかしくなつたからすぐ手を離した。

第五話「灰色夢」（前書き）

更新遅れてすみません><
今日が明日にもう一話！

第五話「灰色夢」

それは酷く鮮やかに、

第五話 「灰色夢」

『 、 、 、 律 』

白こうつな濁つたよつな空間にあこつの声が響く。

背景なんて何にも無くて異空間のよつな部屋に俺とあこつの二人だけ。なぜか見覚えのあるシーンで。

床についている自分のものであろう手鏡に目を向ける。それは手鏡のよつな小物で、そして酷く汚れていた。

あこつが俺の名前を呼んだとこついとまおわいへへへへへへ

これは俺なのか - - ?

『 、 、 、 律 』

背中に電流が流れたような感じがした。

『 、 、 、 立てる 』

あいつが俺に近づいてそっと手を伸ばす。俺はその手を何の迷いもなく握った。するとあいつは嬉しそうに微笑んで俺の頭を撫でた。

『 - - - , , , 』

ジリリリリ、と聞き慣れた音が部屋に響いた。

『 もう朝か、 、 、 』

あの夢は毎晩見る。

だけどあいつが微笑んだ瞬間必ず目覚ましがなるんだ。続きが気になるわけでもないが、目を覚ますとあいつが居るのではないかと部

屋を見回してしまつ。

あいつがあの夢の中の俺にとつてどんな存在なのか。あいつは誰なのか。

どうしてもそれを知りたいと思つ俺がいる。

『おひさまよ。葵……。』

『おはよつミサキ。相変わらずトーンショーン高いねえ』

少し呆れ氣味に言つたんだけど、ミサキはそんなのお構いなしにクラスマイトに次々とあいつをしていく。おちやめだなあ。

ちよつどあたしが登校中に乱れた制服を直し終わつた直後、ガララ、と後側の扉が開いて、日向くんが入つて來た。

少しだけ顔色が悪い氣がして声を掛けよつと思つたけど、やつぱりおでこのキスを思い出して恥ずかしくなつたからやめた。

第六話「ヒカルへなー」

カルのじお伽話

第六話 「ヒカルへなー」

『おまえの口回りで……』

『あ、ねえ』

『口回りがねえよー』

『ねえ、』

周りにハートが散つてねうなぐらハーレム状態の口回りを
特に何もないくせにめうめう見まぐるあたし。

いや、だって、普通乙女なり
キス（おでこ）した後なんて意識しまくってよー。

ただでさえかづこよくて敵がこつぱーこるのよ、よー

「れじやあ一生まともに話せない……」

「てゆーかどうして口向くとはあたしにキス（おでこ）なんかしたんだね？

ちゅうとした出来心？それとも単なる悪戯？

・少なくとも本気じやない

あ、なんか胸が痛い。

肺がおかしい。息が詰まつたよつた、そんな感じ。

苦しい。

なんだねーの気持ち、
よく解らないけどなんだかずーく切ない、

『久原、おはよー』

突然真上から降ってきた声に見上げれば
鼻が触れそなぐらいの場所に少し幼さの残つた美形。

『・・・お、おはよー ragazziます……』

『おう。てゅーか俯いてどうした？具合ワリイのか？』

『ううん、何でもない！』

どうか、と心配してくれたのか

他の人達に聞こえそうな位煩く鳴つてゐる心臓に気付かないフリをして、チャイムと同時に鞄から教科書を出した。

きつとあたし今顔真っ赤だあ、

まあ、そりやあ田向くんはカッコイイから、
とかかずの仕事もなになー?うん、ほっとけば。すぐなくなるよ。

四

心臓を宥めるので必死で、

やつぱり
あたしはバカだ。

このとを曰くへんに一言でも声を掛けていれば
あんなことにはならなかつたのに。

死ぬまでお傍に、

第七話「透色ナリ。」

『お前もしかして、俺の事避けてる?』

・・・教室のど真ん中で（休み時間だけ）
いきなり何言つてんだ この人は

・・・いや、そりや避けてるかもしないけど、元はといえば
貴方のせいでこうこう展開になつてんですよー? 田向くんー!

年頃の女の子にいきなりキス（おでこ）して・・・!
動搖しない子はいないよー

『そ、そんなこと言やこよー。』

『バリバリ動搖してんじゃねーか』

『そそそれは、舌が回らなかつたとですよー。』

『ビーの人だよオマハ』

ははっ、てまたもや天使みたいな悩殺笑顔で曰向くんは笑つた。同時に周りの女子から黄色い声が聞こえてきた。乙女だなあ。

『キスの事、気にしてんだつたら謝るけど』

『え、そ、そんなんじゃなによつー。』

いや、実際そなんだけど。

なんか恥ずかしいから言わないでおこひ。

『そりか？・・・じゃあ今度なんか奢るよ』

『い、いーよ、そんな』

『お前が良くても俺が罪悪感感じるからいやなんだよ』

曰向くんは少し眉間にしわを寄せた。『ううん』はしてもかつこいーなあ・・・・・イケメンは何してもかつこいーなあ・・・・・

『・・・・・じゃあ、お願ひします』

『りょーかい』

あ、また笑った。

ダメだなあ 欲求不満のかなあたし、
田向君の笑顔にこんなにときめくなんて。

やつぱりかっこいいからかなあ、モテモテだし。

うん、確かにものすごいかっこいい。
何気におかわいいし、やさしいし。

仲良くなりたいなあ・・・

恋なんて米粒ほども知らないあたしは、
この感情をどうすることもできなくなつて

田の前で綺麗に笑つてこる田向くんに

ただ見とれている事しか出来なかつたんだ。

動き始めた、

サファイア色の歯車

第八話「あいせつ」

待つてましたとばかりに、
昇り始めたあたしの何か

第八話「あいせつ」

学校から家へ帰るとき、
ちょうど一本道の真ん中に見覚えのある黒いベンツが止まっていた。
運転席には綺麗な金色が見えて。

（あ、日向くんの付き人？さんだ・・・）

（なんでこんなところにいるんだろう？）

とりあえず顔見知りでもないし
ただ気になるだけだったから、普通に横を通り家に入った。

翌日、玄関を出ると黒いベンツは無くなっていた。
日向くんを送りにいったのかな・・・

• • • • • •

『あーおいつ！』

グイツ

つうわあ！？

いきなり方を掴まれて、うしろへ引っ張られた。
ちょつと驚き事をしてたあたつては力ナリ乞驚つた・・!

『あははつびつくりしたでしょー?』

すぐ横には明るい茶色が見えた。

『あつたりまえでしょー...!!ササ!』

『JRめん、JRめん』

ミサキはかわいい笑顔を見せながら、顔の前で掌を合わせて

ふざけたように無邪気に笑つた。

憎めないなあ。

『ていうか何でいつの道にいるの?遠回つこなつちやつじよへ』

あたしと//サキは家が反対方向で、一緒に帰つたりできない。
本当は行きも帰つも一緒に行きたいんだけど……。

『今日はまつもよつ早めに起きたし、薬と行くつと思つて』

・・・え・・・・?

まさか、

『・・・わざわざ来ててくれたの?』

『うそ』

なつ、なんて友達想いな子なの?!!
うわ、どうしよ、めちゃめちゃ嬉しい・・・

『//ミサキ・・・・・』

『いい友達持つましたねエ、久原さーん』

そのふざけた敬語がまたおもしろくて、嬉しくて

『はーつ 本当だーーー』

『・・あははーー葵涼日ー！ホント涙もろいんだからー』

ばん、とかつひつ強めに背中を叩かれた。

ほんとにいい友達もつたなー自分！

『おひさまひー』

『おはー』

教室のドビラをガラリと開けて、
ミサキに続いてあいさつをした。

『おはよう、葵涼ちゃん、ミサキ涼ちゃん』

『一人とも遅いよー』

『あれ、今日は一人できたの？』

クラスの女の子達が反応してくれた。

男の子は気付いてるっぽいけどあこせつを返してくれない。
そういう年頃なのかもしれないけど、やつぱりちょっと物足りない
なあ

『久原、おはよ』

少しだけハスキーな声に振り向けば、やつぱり美形がじつちを見て
た。

『ひゅ、田向くんーおはよー』

慌ててあいさつを返したら、少しだけ笑われた。

胸らへんが少しだけきゅうってなって、顔が熱くなつた気がする。
何だらう、これ？

『『『おはよう、田向くんー』』』

『『『やあ、律くんーおはよー』』』

周りの女の子達も次々に田向くんにあいさつしていく。
みんな頬がピンク色になつていて、眼がキラキラしている。
恋つてそんなにすごいものなのかなあ・・・？

つていうか今、誰か日向くんのこと名前で呼んでたよね。
話した事もないのに名前で呼ぶのって失礼じゃないかなあ？

『あんたの彼氏、やつぱかっこいわね……ありやモテない方
がおかしいわ』

・・・・・え、か、彼氏・・・・?

『ひゅ、日向くんって彼女いるのーー!?

い
・
・
・
・
・
・
・
あ
・
・
・
・
・
・
・
し、しまった
・
・
・
・
・
・
・
つ、つ

・・・・・あねい、声でかいな

ミサキが呆れたようにため息をつき、そういった瞬間あたしたちの回りにいた女の子達が一気に日向くん方を見て、

四

学校中に聞こえたんじゃなにかってこのねつねつ声だつた。

でもあたしにはそんなのどうだって良くて、

ただ田向くんの答えだけが気になつてしまつがなくて。

田向くんの口が開いた瞬間、既にあたしの思考回路は止まつていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6867c/>

モノクロームの部屋の中、君だけが色をもっていた

2010年10月28日07時51分発行